

## On Several Parallels Found in Ainu and Nivkh Cultures

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: チュウネル M., タクサミ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001199">https://doi.org/10.15021/00001199</a>

# アイヌとニヴフの文化に見られる 若干の平行現象について

チュウネル M. タクサミ

## 1. はじめに

北太平洋域は、大洋や海、また多数の河川や湖沼によって囲まれているため、しばしば「青い大陸の国」とも呼ばれる。北東アジア、北アメリカ、オホーツク海沿岸、アムール流域、サハリンと北海道、アリューシャン、コマンドール、クリル（千島）諸島には、太古より、所与の自然・気候・生態学的諸条件に適応する文化を創造した、さまざまな民族が暮らし、漁撈民、海獣狩猟民、狩猟民、採集民の独特な文化が形成されてきた。原住諸民族の伝統文化には、これらの文化を通底する平行現象が数多く見出される。それは、さまざまな民族が複雑な生態学的条件のもとで形成されたという事実によって説明される。しかし、多くの文化要素はどうやら、広範な民族的、文化的接触の結果として広まったようである。北太平洋域で暮らしてきたわれわれの先祖はかつて、交易を目的とする旅を実行し、獲物の豊富な新しい土地を開拓しながら果敢に相互交流を展開していた。私の考えでは、彼らがかかる交流を、20世紀のわれわれの世代よりも遥かに積極的に推進していたと想定される。彼らは遠隔地への旅を、水路は舟で、また冬季には犬橇を駆って実行していた。

歴史時代の過去におけるサハリン島とアムール下流域では、北東アジアの諸文化と南方地域の文化が接触を重ねていった。北太平洋域では北方文化と南方文化を結ぶ通路がここを通過していた、ということもできる。当該地域で展開された複雑な民族的、文化的プロセスは、「オホーツク文化」によって確認されるように思われる。本稿では、サハリンのアイヌとニヴフの間に認められる文化的平行現象をテーマとして、関連資料を考察する。

## 2. 人の移動と文化交流

アイヌはその歴史発展のなかで、遥か北方に位置する異民族環境、つまりニヴフの集住する領域へ進出する（初期の史料によると早くも13世紀には、ニヴフ、ツングース系諸部族およびアイヌがアムール下流域に在住していた）。20世紀半ばになっても、アイヌとその子孫が住んでいたニヴフの村、アイヌが通婚していたニヴフの氏族、アイヌの習俗の特異性について、最年長世代のニヴフから聴取することができた。彼らは、アイヌがアムール下流域に住みつくようになった理由を、それぞれに説明していた。理由

はいろいろあるが、最も重要なものは新開地、新しい漁猟場の探索であったという。かかる遠路の旅を実行したのは、ほとんどが漁猟に従事する男たちであった。彼らは操業中に自然災害と遭遇し、あるいは天候不順のため、異郷に流れ着くことも珍しくなかった。私は1950年代にアムール下流域のニヴフから、ニヴフが住んでいたキジ湖のある地区に、アイヌがどうして暮らすようになったか、を物語る伝承を採録した。その梗概は以下の通りである。

海獣猟のため舟で海へ出たサハリン島のアイヌが、激烈な濃霧のなかを漂流して大陸に流れ着いた。そこはムズルフ (Muzylf) という名のニヴフの村だったが、この地名は「舟を曳いて渡る連水陸路の場所」を意味する。事実、その場所には狭い地峡があり、同村は海とキジ湖を結ぶ川の畔に立地していた。濃霧に襲われてキジ湖畔に迷いこんだアイヌたちは、こうして、タタール湾のニヴフの村やキジ湖岸に初めて住み着いたわけである。

これは恐らく、太平洋北岸の諸民族と同様、ニヴフとアイヌがサハリン、アムール流域、北海道を互いに訪ね合いながら、積極的に交流を重ねていた時期の初期の出来事であったろう。ほかならぬこの時期に、彼らの間で文化の相互交流が行われた。これは恐らく、満州人や漢人がアムール下流域へ到来する13世紀よりも前のことであったろう。

### 3. 基層としての海洋文化

北太平洋域の他の諸民族と同様、アイヌでもニヴフでも遡河性のサケ科魚類を対象とする漁撈が大きな役割を演じていた。当該地域では至るところで、サケ科魚類の干した肉片を貯蔵していた。「ユーコラ」と通称されるサケの乾燥肉片は、カムチャツカやサハリン、アムール中流域、チュコトカ、そしてまた北米北辺でも、原住民はこれを越冬食として保存してきた。これらの民族の間では、漁撈具や漁法が多くの点で似通っている。

北太平洋域では古くから海獣狩猟が発達した。海獣猟の獲物は、肉が食料に、皮革は衣服や履物、ロープの素材として広範に利用された。その際、海獣皮革の加工法では多くの共通点が指摘されている。海獣狩猟民の間に各種の銛、とりわけ回転離頭銛が広範に分布する事実は、格別に印象的である。

海での生活や狩猟対象の海棲動物に関する類似した表象もまた注目される。海獣狩猟民の伝統的表象によると、海棲動物とりわけアシカやアザラシは人間の言葉を解し、テレパシー能力を有するという。

北太平洋域では多くの民族が、漁撈や海獣猟の成否は「水の主」の差配によると考えていた。したがって、彼らは岸辺に「イナオ」を立て、儀礼食を水中へ投じて、「水を養う」ための供儀を行った。

舟を生き物と見る表象も広く分布している。舟の舳先には水鳥もしくは海棲動物が描かれるか、その彫像で飾られているが、そうすれば舟はそれらの素質を具えて、水上を軽快に疾駆すると想定されたからである。しかも、新造の舟を水に降ろす前には、煙いぶしによって悪霊を駆逐するのだった。その際にも「水を養う」儀礼を行う。

北太平洋域の諸民族の文様には、特に多くの類似する要素が認められる。とりわけ太陽や月といったシンボル標識、永遠不滅などを示す記号に認められる類似性には瞠目させられる。私は、入れ墨の記号もまた注目に値すると考える。われわれは入れ墨が、アイヌのほかにはコリヤーク、エスキモー、チュクチの間にも認められることを承知している。学者らは、そこに見出される類似したモチーフに注目してきた。

#### 4. アイヌとニヴフ

アイヌとその北方の隣人であるニヴフの間には、とりわけ多くの共通する文化要素が認められる。アイヌとニヴフは長いことサハリンで暮らしており、彼らの歴史的関係は既述のように遠古の彼方まで遡る。アイヌはサハリンの南部において、多くの人口を擁する村々に集住していた。しかしながらタライカ湾岸では、ニヴフやウイльта系住民、とりわけシスカ（敷香）の住民と隣接して暮らしていた。19世紀にはアイヌ系住民が、サハリン西岸の遙か北方にまで達していた事実が記録されている。例えば19世紀半ばには、ニヴフのホエ村の近傍、その数キロ南方にアイヌの村があって、そこには「ニヴフの習俗を有する」アイヌが住んでいた。タライカ湾岸で暮らすアイヌの文化にも、ニヴフ文化と共通するものが多く見出された。私の考えでは、北サハリンの東海岸一帯、ダギ湾やナーベリ湾の沿岸に住み着いたアイヌの個々の家族が、ニヴフの生活様式を完璧に取り入れて、ニヴフ文化も含めた彼らの民族環境に適応していったと想定される。一部のアイヌはアムール流域へ移住してニヴフの環境に適応し、アムール諸民族の間で同化されていった。アイヌの末裔の一部は今日、クイサリ（Kujjali）という氏族名で知られる。この氏族名は頗る遅くに成立したもので、原住民に由来する。ニヴフらが語るところによると、アイヌの人たちは自らが婚姻関係を結んだ女の属する氏族に参入したが、自前の氏族を創設する者もいたため、ニヴフの氏族の幾つかは、例えばアルゴン（Argon）、ウグヌン（Ygnyn）のように、アイヌに淵源するという。アイヌは新しい民族環境へ自らの文化要素を持ち込んだ。残念ながら、われわれはこれについていまだほとんど知らない。異郷のアイヌは概ね、アムール下流域でもサハリンでも、現地文化を広範に受容している。私の考えるところ、レオポルト・シュレンクやリエフ・シュテルンベルグといった、アムール下流域やサハリンの諸民族の研究者は、当然にも、アイヌが現地の狩猟・漁撈具、冬の衣服や履物、若干の種類舟を借用したと記している。このテーマは、もっと真剣な検討に値すると私は考える。

加えて、ニヴフとアイヌの文化に認められる平行事象を証する資料も幾つか紹介しよう。まずは「熊祭り」から始める。私はかつて文献を渉猟するなかで、ニヴフとアイヌの熊祭りの間に驚くべき類似性を発見したことを指摘したい。かかる類似は、祭りの儀礼に使用される道具でも、また熊を親族と看做す表象においても見出される。就中、私は1987年に北サハリンのニヴフのもとで熊祭りを執行し、また1994年には白老でアイヌの熊祭りを参与観察したが、両民族の熊祭りには最も多くの共通事象が見出されるとの結論に達した。例えば、ニヴフでもアイヌでも、熊を「送る」際に引き回す儀式が行われるが、その現場には「儀礼柱」が立てられる。アイヌの熊祭りでは「イクニシ」という供儀用の木彫籠が、至るところで儀礼具として使用される。これには多くの象形文字が彫り込まれている。ニヴフでは多くの杓子や匙が広く使用されるが、これらにもやはりニヴフの生活からとられた各種の題材が描出されている。特に多いのは熊の描写である。そのほかに、ニヴフの氏族生活からとられた一連の出来事、とりわけ熊の飼育にかかわる出来事を描写する主題も少なくない。そこでは熊が、どこで捕らえられ育てられたかが語られ、年齢が示され、どのように育て給餌されたかが描かれる。杓子に記された象形文字は学者たちの注目を集めた。アイヌの「イクニシ」に記された象形文字もやはり、学者たちの研究対象となったことを承知している。

とりわけ美しい情景は、ニヴフやアイヌの熊祭りで行われる舞と遊戯、楽器演奏、歌唱や群舞である。熊祭りはニヴフでもアイヌでも、一族統合のため、また民族芸術、音楽的フォークロア、舞踊術、伝統的世界観、民族習慣、そして伝統を維持するためにも、大きな社会的役割を果たしていた。

アイヌでは、熊崇拜が広範に認められる事象であり、何よりもまず、熊を檻のなかで飼育する習慣と結びついていた。「イナオ」と称する削り掛けの崇拜も、熊と緊密に結びついていた。

ニヴフでも、熊はやはり檻のなかで飼育されて、氏族の特定の人物の名と結び付けられた。私には、「イナオ」崇拜が熊崇拜とも、また自然崇拜——大地や水その他の崇拜——とも関連するよう思われる。ニヴフでもアイヌでも伝統漁撈では、同様な網、小ぶりの魚網、釣り針やヤスが用いられた。それらの使用法は、照明の下でのヤス漁に至るまで類似が認められる。海獣猟では海上でも水辺でも、アイヌは長い棹の先につけた銛を使用してアザラシを仕留めた。この種の銛をニヴフは *ila* と称するが、「泳ぐ銛」という意味である。私は20世紀の50～60年代に、このような銛をアムール川の潟やサハリンで実見した。

サハリンで調査を実施した際、ニヴフの海辺での採集活動、とりわけ貝や昆布の採集に関する資料を収集した。北海道でもアイヌのもとで、アイヌが貝や昆布を採集するときに使用する道具——尖った歯先付きの棹や先が二股の棹——を実見した。アイヌでもニヴフでも竜骨付きの頑丈な丸木舟が広く用いられた。丸木舟は概ね棹で操られたが、

平坦な岸に沿って航行する際は犬にも曳かせた。樺太アイヌには、ニヴフのものとよく似た犬橇があった。両民族では、深い積雪のなかを進む際に、両足に短いスキーを履いて橇に跨ることも珍しくなかった。この様子は、間宮林蔵の著作にある挿絵でも見ることができる。

樺太アイヌでは、例えば魚皮製の衣服やアザラシの皮革でこしらえた衣服のように、裁断でもまた素材に関しても、典型的なアイヌの衣装と北方系衣装が共存していた。作業衣としては、アザラシ皮革製の前垂れスカートが広く用いられた。この衣装はニヴフでも広く普及しており、*kosk* と称した。瞠目させられたのは、アイヌが爪先を髷取り法で仕上げたアザラシ皮革製の靴を製作する事実である。ニヴフ語ではこの種の靴を *elki* と称する。親指の上方に開口部のある毛皮製のミトン、アムール風の文様が施された耳当ては、やはり北方系の文化と結びつく。興味深いことに、アイヌでは火打石を納める小袋やチョウザメの皮でこしらえた鞆が見出されるが、これらはニヴフの間にも広く普及している。

家庭用品についても、形や彫り方に関してニヴフのものを髣髴させる木彫板や木製杓子が、アイヌのもとでも多く見出される。それらのうちの幾つかには、太陽を表す記号のような象形文字が、手彫り装飾として認められる。

樺太アイヌは獣脂を貯蔵するために、海獣の内臓を広範に利用した。アイヌの住居近くには常時、獣脂で満たされた内臓が物干しに満艦飾であった。同じ光景はニヴフの納屋のなかでも観察された。彼らはその中に魚油や海獣脂を貯蔵し、一年を通じて広く食用に供した。音楽の演奏においてアイヌは葦、竹、鉄製の「ムックリ（口琴）」を楽器として用いた。この種の楽器は、ニヴフやその他の北方諸民族の間にも広く見出される。アイヌとニヴフの手太鼓は同じ構造である。樺太アイヌの間では、北方の隣人の装飾モチーフも普及していたが、そのようなモチーフは日用品や衣服も装飾していた。アイヌの女性には、各種の石を連ねた大輪の耳環を見ることもできた。このような耳環は、とりわけ軟玉を連ねたものが、19世紀から20世紀初頭にかけてニヴフ女性の間で流行していた。

ニヴフとアイヌの精神文化に多くの共通事象が認められることは、既述の通りである。ここでは、アイヌ文化を研究するなかで、倒立させた儀礼樹に注目したことを指摘したい。そのような樹木はニヴフの間でも見出される。アイヌの熊祭りでは、先端の鈍い矢を（熊へ向けて）射掛けていた。ニヴフにも同様な矢があり、ロシアや北海道の博物館に収蔵されている。ニヴフはそれらを熊祭りのみならず、自然の邪悪な力に挑む闘いでも使用し、風や雷などへ向けて放つのである。

アイヌとニヴフはその歴史的発展のなかで、北太平洋域の膨大な領域を開拓した。彼らはその途上で多くの民族や民族集団と出会うなかで、民族的、文化的接触を重ねていった。文化的財貨が広範に交換された。ここ数世紀の間、アイヌは隣人の北方諸民族、

とりわけニヴフとは、かなり緊密な接触を続けた。「異文化を身につけたアイヌ」「ニヴフ文化を具えたアイヌ」という表現は、アイヌがより北方の土地へ進出するなかで、苛酷な気候に適応した北の隣人の文化をも学び取ったことを意味するものと、私は考えている。言うまでもなく、アイヌは自らの文化を新移住地へもたらし、その一部は原住民によっても受容されている。このような事象の研究は、北太平洋域におけるすべての複雑かつユニークな古代文化の研究と同様、今後ともさらに取り組むべき課題である。

[ロシア語原稿から井上紘一訳]